

話しことばにおける「テハイケナイ」使用の実態

黄 若白 (こう じゃくはく)・創価大学

本発表は、「非許容」を表す当為的モダリティ形式「テハイケナイ」を取り上げ、生きた話しことばにおける使用実態と用法の特徴的な傾向を明らかにすることを目指すものである。教科書に多く現れる「禁止」の文が実際にどのような文脈で用いられているか。「テハイケナイ」の典型的な用法とは何か。これらの疑問に対し、具体的な形で回答を示す。

本発表では、「学会講演」、「模擬講演」、「雑談会話」、「職場会話」のコーパス用例をデータに、「テハイケナイ」のジャンル別の使用形式の出現頻度、文脈環境、および用法の分布について実態調査を行う¹。ジャンル別の出現数を、前半（条件接続「テハ」）・後半（帰結部「イケナイ」）の異なりごとに次の表 1 に示す。

表 1 コーパスにおける「テハイケナイ」の出現数

ジャンル	模擬講演	雑談会話	職場会話	学会講演
100 万語単位の出現数	87.92	54.35	39.73	20.13
出現総数	317	109	16	66
総語数	3,605,729	2,005,675	402,742	3,279,364

内訳

後半	前半		テハ	チャ	テハ	チャ	テハ	チャ	テハ	チャ
	①	②								
イケナイ	①		43.82	35.50	6.48	47.86	4.97	34.76	6.10	5.79
	②		158	128	13	96	2	14	20	19
ナラナイ	①		8.32	0.28	0.00	0.00	0.00	0.00	8.23	0.00
	②		30	1	0	0	0	0	27	0

コーパス例との結びつきが強い動詞をまとめると、表 2 ようになる。「言う」は独話・対話の違いにかかわらず、高い共起頻度を示す（「独話」：「模擬講演」、「学会講演」をあわせた 383 例、「対話」：「雑談会話」、「職場会話」をあわせた 125 例、以下同様）。

表 2 「テハイケナイ」が結びつく動詞

独話	忘れる	言う	ある	使う	行く	掛ける	信じる
	26	20	13	9	7	5	5
対話	言う	笑う	見る	入れる	行く	作る	寝る
	17	5	4	3	3	3	3

※「する」、「やる」、補助動詞の「動詞テ形-くる／いく／みる」を除外した結果である。サ変動詞は語幹の動名詞別で集計を行うことにした。

用法の調査では事態の自己制御性、主体の人称性を調べる方法を用いて観察・集計を行った。用法分布（表 3）と先行研究の分析との対応を示すため、高梨（2003・2010）における用法・機能分類を自己制御性、人称性のタイプ別に整理した結果を表 4 として添える。

¹ 調査資料：国立国語研究所・情報通信研究機構・東京工業大学『日本語話し言葉コーパス』、『名大会話コーパス』（「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」（研究代表者：大曾美恵子）の一環として構築されたコーパス）、現代日本語研究会（編）『女性のことば・職場編』『男性のことば・職場編』

表3 コーパス用例の用法分布

		主体の人称性											
		一人称(群)		二人称(群)		三人称(総称的)/不問		非情物主体		判断不可能			
事態の自己制御性	自己制御的-達成	独話	対話	独話	対話	独話	対話	独話	対話	独話	対話		
		256	103	52	35	18	10	186	58				0
			68.8%	83.1%	14.0%	28.2%	4.8%	8.0%	50.0%	46.8%			0.0%
	自己制御的-過程	独話	対話	独話	対話	独話	対話	独話	対話	独話	対話		
		68	18	16	10	2	2	49	6				1
			18.3%	14.5%	4.3%	8.0%	0.5%	1.6%	13.2%	4.8%			0.2%
非自己制御的	独話	対話	独話	対話	独話	対話	独話	対話	独話	対話			
	48	3	0	1	0	0	3	0	45	2		0	
		12.9%	2.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.8%	0.0%	12.1%	1.6%	0.0%	

※判定詞「deal」に後接する場合の用例を除外し、独話の372件と対話の124件をデータに集計した結果である。

表4 高梨(2003・2010)における用法・機能の整理

		人称性		
		一人称(群)	二人称(群)	三人称(総称的)/不問/非情物主体
自己制御性	自己制御的	後悔/言い聞かせ/許可要求	行為要求・禁止/否定の忠告/不満	(客観的非許容)
	非自己制御的	危惧		

※高梨の分析では人称を「聞き手」と「聞き手以外」の2種としている。客観的非許容の用法に対する位置づけはあくまで高梨が挙げている例から推測したものである。

「テハイケナイ」が現れる文脈について調査した結果は次の表5の通りである。

表5 コーパス用例の文脈環境・共起関係

	独立文		従属節								言いさし
	文末言い切り	他形式が付加	連体修飾節	引用節(例示)	理由節	条件節	逆接節	等位・並列節	時間・様態ほか	節内引用	
独話	32	35	142	88	17	0	4	6	2	19	38
	8.36%	9.14%	37.08%	22.98%	4.44%	0.00%	1.04%	1.57%	0.52%	4.96%	9.92%
対話	15	38	16	18	1	1	1	3	1	9	22
	12.00%	30.40%	12.80%	14.40%	0.80%	0.80%	0.80%	2.40%	0.80%	7.20%	17.60%

用法と文脈環境の量的分布に対する主な観察結果として次の3点が挙げられる。

- (1) 二人称主体の場合における「行為要求」、「否定の忠告」の例のほとんどは引用における他者の発言内容の再現であり、現場での働きかけが生じる例は現れなかった。
- (2) 「あまり言っちゃいけないんですけど。」(「模擬講演」S04F1297)のようなメタ言語的に用いられる例や「忘れちゃいけないのは...」(「学会講演」A07M0658)のような主張を述べ立てる際に用いられる例が多く現れており、特徴的な使用として挙げられる。
- (3) 用例全体の大部分を占めている三人称主体/不問/非情物主体の場合の例は広い意味領域をカバーしており、意味・用法の複雑さを示す。用法規定の精密化が必要である。

主な参考文献

高梨信乃(2003)「評価のモダリティ」日本語記述文法研究会(編)『現代日本語文法4 モダリティ』/高梨信乃(2010)『評価のモダリティ—現代日本語における記述的研究』くろしお出版/日本語記述文法研究会(2008)『現代日本語文法6 複文』くろしお出版